

《生きることの終大成を支える

第5回終末期懇談会
平成21年12月24日

資料1-1

相談支援ガイドライン》

- 1) 生きることの集大成を支える共通言語を探す
- 2) 大前提：共通言語「ICFの生活機能」に基づく
- 3) ICFを用いて人生の集大成を支える
- 4) 3) にあたって以下の点を理解しよう
 - ① 実体と構成概念を混同しない
 - ② 終末期で使う「ことば」の意味を理解する
 - ③ 差し控え・中止と不作為・作為を考える
 - ④ 緩和ケアの展開
 - ⑤ 終末期の概念整理
 - ⑥ 実体(生き方支援策)を修復
- 5) 日本でのICFの有効活用について
- 6) まとめ

1) 生きることの集大成を支える 共通言語を探す。それは《生活機能》

- 残された時間がわずかでも、今、ここに人は生きている。生きることを支えよう。死は生きた結果であり目的ではない。(川島)
- 共通言語を示す。それはすべての人に関係する言語でなければならない。
- 生活機能：人が「生きること」の全体を示す共通言語。すべての人に関係する。

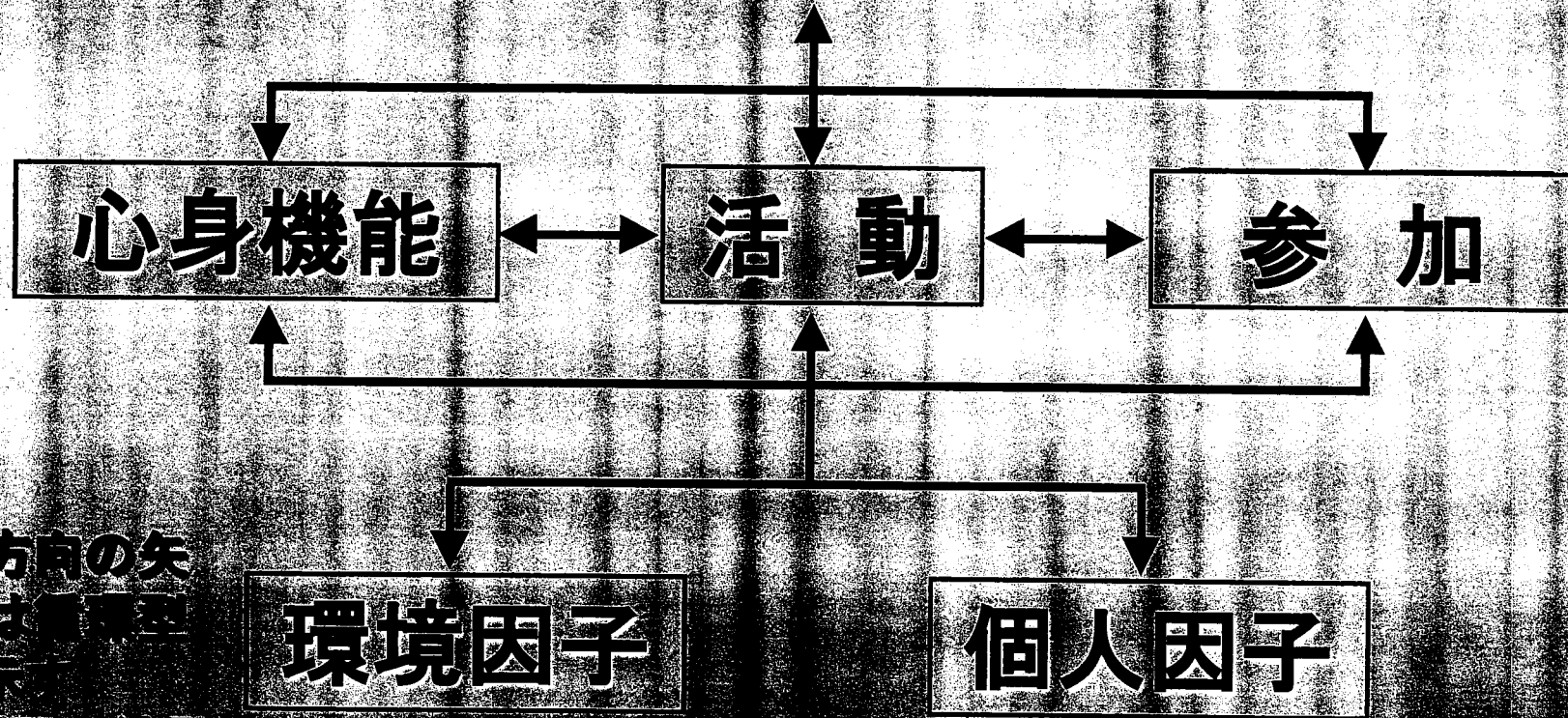
□ 大川弥生：生活機能とは何か。東京大学出版会。2007

2) 大前提:ICFの生活機能に基づく

- ICF:国際生活機能分類 (WHO2001年提唱)
 - 生活機能とは:人が「生きること」の全体を示す共通言語。すべての人に関係する
 - 健康状態とは:心身機能、活動(生活行為の全体)、参加(家庭・社会参加等)の全体像であり、疾患・外傷に限らずいろいろなものを含む広い概念
 - 本人が「このように健康である」と思考の上で構成する構成概念でもある
-

ICFを用いて人生の集大成を支える 障害もあるがまことに思える。五体不満足の思想

健康状態



↑ 双方向の矢印は循環型を示す (原因-結果型ではない)

4) 以下の点を理解しよう

① 実体と構成概念を混同しない

- **実体(実在性):** 思考の内にもみ存在する観念と独立に、事物、事象として在立すること
- **構成概念:** 我々の知覚において完全には与えられはしないが、我々が知覚する事柄を理論的に説明するために構成され、導入される概念
- 「他人の死」は知覚される実体であるが、「自分の死」は決して知覚できない、経験されない構成概念である。

□ 下中 弘 : 哲学事典: pp469、597、平凡社、1992.

① 実体と構成概念を混同しない

- 尊厳：構成概念であり実体ではない
- QOL：構成概念であり実体ではない
- 終末期：構成概念であり実体ではない
- 延命医療：構成概念であり実体ではない
- 自分の死：構成概念であり実体ではない
- 構成概念は心が創り出すので、常に変容し固定不能である。定義・規定すべきでない